

2000.7.29(土)～7.30(日)

於：ウィーン大学

姫路獨協大学における日本語インターンシップ・プログラム実践報告

—新たな日本語教員養成課程への位置づけ—

姫路獨協大学 山崎 恵

1. 姫路獨協大学における日本語インターンシップ・プログラムの経緯

このプログラムは、1990年の春、本学外国語学部日本語学科の1期生が4年次になるのにあわせて、小出詞子名誉教授(当時、学科長)によって始められた。小出(1996)には次のようにその経緯と趣旨が述べてある。

本学は留学生が少ないため、日本人学生(以下、学生)と留学生との接触が少なく、また、当時「日本語教師になる」という学生の自覚も足りなかった。その様子を見て、私、小出は、将来日本語教師を志望している学生のために、学外のいろいろな日本語教育の場に触れさせることが必要ではないかと考えた。しかし、国内での日本語教育の場には限りがある。海外の日本語教育の現場に派遣し、現状に触れさせ、学生自身が「日本語教育とはどのようなものであるのか」ということを理解し、見聞を広める。これが、本プログラムの経緯および趣旨である。

上述のとおりこのプログラムは当初6年間は小出名誉教授の単独作業で行われていたが、1996年度からは日本語学科主催となり組織化されてきた。大学の認めるプログラムとなったことで、予算面では大学側が参加学生の海外旅行保険の基礎保険料を負担することとなり、業務を手伝うアシスタント費も計上された。また、大学の健康管理室も協力して出発前の指導に当たることとなった。さらに1999年度は報告書の印刷費も計上された。

本年度(2000年度)でこのプログラムは10年目を迎える。本年度もこの夏と来年の春に、26名の学生が7ヶ国8日本語教育機関で実施されるインターンシップに参加する予定である。

そこで、本発表ではこのプログラムについて実践報告を行い、この3月に出た日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議の報告書「日本語教育のための教員養成について」に示されている今後の日本語教員養成において必要とされる新たな教育内容への対応の可能性を指摘する。

2. インターンシップの概要

毎年、新年度が始まると前年度インターンシップ参加者の体験談(報告)と併せて、その年度の説明会を実施している。参加希望者の申し込み受け付け後、派遣先や派遣人数の調整をし、オリエンテーションを行う。

【研修参加者】本学日本語学科の日本語教師養成プログラムの「日本語教授法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を受講している日本語学科3・4年次学生(他学科の参加を認めることもある)。1991年に大学院が開設されてからは、言語教育研究科言語教育専攻(日本語領域)の院生も対象とするようになった。派遣人数は、大休、一大学或いは一教育機関に2名程度である。

【研修期間】本学の休暇期間に実施する(夏は8月上旬～9月上旬、春は2月中旬～4月上旬の2週間から4週間)。

【参加者負担必要経費】渡航費及びそれに関わる費用、滞在費(食費 etc 含む)。

【活動内容】派遣機関での参加者の活動内容は、派遣先によって異なるが、日本語クラスの見学以外に、教材作りの手伝い、テスト・宿題の採点、ティーチングアシスタントとしての教室活動、イベント(スピーチコンテスト etc.)の手伝い、クラス外での個人指導・会話の相手などを行う。授業見学を基本にしており、実習については本学からは特に依頼をしていないが、派遣機関の好意で実習をさせてもらえるところも多い。参加者は研修終了後、報告書を受け入れ機関及び大学に提出する。

3. これまでの参加者数及び派遣先機関

		1989年度	1990年度	1991年度	1992年度	1993年度	1994年度	1995年度	1996年度	1997年度	1998年度	1999年度	計
オ	モナシ大	夏		2	2	5		2					11
		春						1					1
イ	ニューカッスル大	夏			1		2						3
		春	3		2								5
ス	クイーンズランド大	夏		2									2
		春											
ト	ワイタキア大	夏		1									1
		春				4							4
ラ	マドック大	夏			2	1		2					5
		春						2	2	2	2	2	10
リ	グレイブズ大	夏			1	1	3						5
	カーティン工科大	夏				1	2		1				4
ア	トロップ大	夏					2						2
	ニューサウスウェールズ大	夏						2					2
ア	スウェーデン工科大	春					2						2
	サウサンプトン大	春										3	3
ニュー	マッセイ大	夏			2	1	1	2					6
		春						1	1	2			4
ラン	ワイタ大	夏						1					1
カナ	ヨーク大	春			2		3	1		3			9
	アルバータ大	春								2	3	3	8
アリ	リントン大	夏			4								4
カ	カリフォルニア大	夏					2						2
シン	シンカポール国立大	夏			1	1	2		2	2	1	1	10
		春	3					1		3	2	2	11
メル	国際交流基金クアラルンプール日本語センター	夏					2						2
		春						1		2			3
タイ	国際交流基金バンコク日本語センター	春						1					1
	ブラーバ大	夏										2	2
香港	中文大	春				2							2
台湾	東呉大	春				2							2
中国	広東省肇慶教育学院	春										1	1
韓国	全北大	春							1	2			3
侍	ロンドン大ロイヤルハロウェイ校	夏									2		2
計			6	5	11	17	13	23	9	7	18	14	133

4.参加者の卒業後の進路

在学中にインターンシップに参加して、本学科の日本語教師養成プログラム（主専攻）の単位を修得した参加者の卒業後の進路を見ると、何らかの形で日本語教育関係の職に就いていることが分かる。以下に主なものを挙げる。これは大学院の修了生も含んでいる。

卒業・修了後の進路	人数
大学院への進学 (修了後、国内外の大学常勤・非常勤講師)	38名
海外派遣青年日本語教師（国際交流基金）	5名 イギリス[2]・オーストラリア[1]・中国・[1]・マレーシア[1]
JALEX プログラム派遣日本語教師（国際交流基金日米センター/ローラシアン協会）	2名 アメリカ
日本語 OSCY プログラム派遣日本語教師（日本 YMCA 同盟）	1名 台湾
交流協会派遣日本語教師	1名 台湾
青年海外協力隊派遣日本語教師（国際協力事業団）	14名 中国[2]・ウズベキスタン[1]・タイ[3]・スリランカ[1]・シリア[1]・トンガ[1]・ブルガリア[2]・ルーマニア[1]・ハンガリー[1]・ポーランド[1]
オーストラリアヴィクトリア州政府日本語教師アシスタント(小・中・高)	22名
海外の大学等日本語教育機関講師(上記以外のプログラム及び個別契約による)	42名 ドイツ[2]・フランス[1]・オーストラリア[2]・ニュージーランド[2]・アメリカ[2]・メキシコ[1]・エクアドル[1]・シンガポール[2]・マレーシア[1]・タイ[2]・ベトナム[3]・台湾[7]・韓国[7]・中国[4]・モンゴル[4]・ウズベキスタン[1]
国内の公的日本語教育機関及び民間日本語学校常勤・非常勤講師	54名
日本語教育関係出版社	1名
公立中・高等学校講師	24名 国語[23]・英語[1]
[留学生]	
大学院への進学	12名
母国の日本語教師	9名 マレーシア[5]、台湾[2]、韓国[2]、

5. 今後の課題—新たな日本語教員養成課程への位置づけ—

当該プログラムは1.の経緯で述べたように、発足当初は小出名誉教授の個人的な繋がりで派遣先機関の好意的な協力を得て行われてきたが、1998年以降、協定を結んで制度化する方向で進められている（現在、インターンシップ協定校は、マードック大学、サンシャイン・コースト大学、アルバータ大学、ロンドン大学ロイヤルホロウェイ校の4校。本年度はタイ、中国、韓国、香港の大学との受け入れ／協定を検討中）。

日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議報告書(2000)では日本語教員養成の教育内容の課題として「日本語学習者の学習需要の多様化や日本語教員養成課程修了者の活躍の場の拡大が見られる現在、大学等の創意工夫による多様なコース設定を図り、例えば海外において日本語教員として活躍することを希望する者や日本語教育専攻の留学生を対象としたコースを設けることなどが求められるようになってきている」(p.4)とある。そして、「日本語教員としての実践的な教育能力を習得させるために、教育実習がきわめて重要であることに特に留意しなければならない」(p.6)とも記されている。

報告書で示された新たな教育内容に本学の日本語教員養成課程を対応させるならば、このインターンシップ・プログラムをさらに充実させ、海外での日本語教育に携わる日本語教師（留学生も含む）、初等・中等教育機関における外国人児童生徒の指導が出来るような国語教育も包括した日本語教師の養成を特色として打ち出していくことが可能であると思われる。

しかし、まだ現在のところ本プログラムは単位としては認められていない。将来的には新たな日本語教員養成課程の内容の中に盛り込み単位化する方向で検討していく必要があると思われる。そのためには、参加者の事前指導の充実を図ることや受け入れ機関との密な連携、参加者の卒業後の追跡調査が必要であろう。また、地域的によりバラエティに富んだ受け入れ校の開拓が望まれる。

[参考文献]

- 小出詞子(1996)『インターンシッププログラム報告書～1990年から現在までの活動報告～』姫路獨協大学外国語学部日本語学科
- 姫路獨協大学外国語学部日本語学科編(1998)『1997年度インターンシップ・プログラム報告書』姫路獨協大学外国語学部日本語学科
- 姫路獨協大学外国語学部日本語学科編(1999)『1998年度インターンシップ・プログラム報告書』姫路獨協大学外国語学部日本語学科
- 姫路獨協大学外国語学部日本語学科編(2000)『1999年度インターンシップ・プログラム報告書』姫路獨協大学外国語学部日本語学科
- 日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議(2000)『日本語教育のための教員養成について』文化庁